



サキユバスに敗北しちやう勇者。サキユバスに負けて催眠かけられてマゾ堕ちしちやう♡

著者 潮美  
イラスト 染也

「ねえもう諦めない？」

はあはあと息遣いが荒い男の前——妖艶な雰囲気醸し出しながら余裕そうに立っている悪魔——サキュバスがそう言った。

「はあ……はあ……」

額を流れる汗を拭い、男は剣を握り直す。

目の前にいるサキュバスの身長は男よりも頭一個分程小さく、推定で百五十センチほどだった。童顔で、顔だけ見ればただの少女だった。まだ顔の要所要所に幼げが残っている。

——ただ、それは、その背に羽ばたく漆黒の翼がなければの話。牙のように固い先端を持ち、規則的に動くそれは月の光さえも吸収し、闇を作り出していた。

そして、それとは対照に純白に輝く金髪が夜風に吹かれ、靡いている。

またサキュバスは露出度の高い服装を着ており、布面積は極端に狭い。腰から上は、胸の左右の中心部と彼女の下半身の秘部にしか隠していない。

サキュバスは上目遣いで馬鹿にするような顔で男を見つめ、腕を背中に組み、脚を交差している。月明かりに反射し、サキュバスの美しい太股が欲情的に照らされた。

——その艶かしい輝きが男の視線を無意識に釘付けにする。

「……はっ！」

自らの意識がサキュバスの美しさに吸い込まれていたことに気づいた男は、頭を振り、

脳内から煩惱を振り払った。呼吸することさえも忘れていた。

男は一度自らの頬を叩いた。戦闘中に意識がそちのけになることなど今までなかった。勇者は今一度、手の中にある剣を強く握りしめた。

絶対にこの勝負は勝たないといけない。負けたらこの街の人々は――。

「まだまだこれからだ」

脳裏に思い出される街の人々の姿に悔しさが込み上げ、唇を噛んだ。口の中に血の味が広がるが構わない。無理やり痛みによって意識を覚醒させる。

「まだまだこれからだ……」

男の言葉にサキュバスが舌なめずりをした。ふふつと微笑を浮かべながら男を見つめる。4

「楽しませてくださいね、勇者さん♡」

＊

――男は勇者だった。国の何の変哲もない小さな街から生まれた。両親も、親戚の間にも勇者が生まれるような血を引き継ぐ者は誰一人としていなかった。皆が、勇者の誕生を祝杯した。そして、勇者は旅に出ることとなる。――目的はそう、魔王を倒すために。

——この国は魔王によって支配されている。いつ支配が始まったのかは分からない。何百年前か、それとも何千年前か、何万年前か。書物によれば、魔王による支配は突如として起こり、前触れもなかったそうだ。魔王軍の戦力は絶大で、圧倒的な戦力と数により、国に住んでいた人々は劣勢に追い込まれ——そして、支配された。

人々は必死に抵抗したが、突如起こった侵略に準備不足であり、対等に抵抗できる手段はなかった。そのため魔王軍の侵略支配は簡単に進んだ。国の人々は魔王軍の一方的な侵略を受け入れる他なかった。

——それから人間は奴隷のように扱われ、毎日毎日耐えきれない生活を虐げられることとなった。食を抜かれ、身体に鞭を打たれ、寝る間を削って働かされる。一言で言えば絶望だった。元々、人間の武力など露ほどにもない。歯向かおうものなら周囲への見せしめとして、殺害される。いつしか、人々は抵抗という言葉を忘れ、希望を失っていた。

——しかし、そんな時に誕生したのが、『奇跡』として小さな街から生まれた男——勇者だった。

勇者の力はこれまでの人間の力とは比べ物にならず、次々と街を支配する魔王軍を打ち破った。そして、そこでの人間の安泰と平穏を取り戻した。

一ヶ月間で十もの街を勇者一人だけで支配を解いた。人々から希望という光を取り戻した。

勇者は彼らにとつて救世主——否、ヒーローとなった。

しかし、順調に人々を救つてきた勇者だったが、ある日のこと、魔王軍を討伐した街でこんなことを言われた。

「隣街の様子がおかしい」と。魔王軍に支配されているのは前提とし、おかしいのは、そこに住んでいる人間達が魔王軍に協力しているという噂が飛び交っているとのことだった。「支配されているのではなくその人達が自ら望んで支配を受け入れているようだ」と街の者は言った。

「——何かの術がかけられているのかもしれないな」

人間と魔王軍は相対し、各々、絶対的に協力不可能な立場のはず。その敵対心を越え、人間が魔王軍に協力しているとなると魔王軍による魔法や術によって支配されている説が濃厚だった。

元々、逆方向の隣街へ行こうと思っていた勇者だったが、行き先をその隣街に変更した。——それが絶望の選択とも知らず。

「——やっと着いた……」

城壁に囲まれた街を見上げ、勇者は呟いた。街に着いた頃にはとつくに日は暮れて満月が顔を出していた。休まず移動し続けたため、少々疲労感が身体を蝕んでいたが、勇者は月光に導かれるように街に足を踏み入れた。そして——

「なんだこれ……」

街に足を踏み入れた瞬間、勇者は目の前の光景に啞然とした。

「なんで……」

目の前に広がる光景——そこには人間と、街を支配する魔王軍——サキュバスが互いに寄り添いながら歩いていていた。サキュバスの体格は様々だが、全員が隣に街の人と思われる男を連れている。

その光景ですら驚きだったが、それ以上に驚いたことが勇者にはあった。それは、サキュバスと共に街の中を歩いている人間——男は衣類を一切身に付けていないことだった。

サキュバスの格好も露出度が高く最低限の部分しか隠していないが、男達は彼女らより布面積は少なく、全裸だ。

首には犬につけるような首輪が巻きつき、首輪の先からはリードが伸び、サキュバスの手の中へと繋がっていた。

背の低いサキュバスと細身の男だと子供に説教され、しょぼくれているような弱気な男にしか見えない。

街全体を一度見渡したがどこも同じ光景だった。しかもそれに加え——

「……女性がいない？」

街の中には女性が一人もいなかった。街の外を歩き、顔を出しているのは男とサキュバ

スだけで、人間の女性の姿は見当たらなかった。家の中にいる可能性もあるが、街全体の気配から察するに、女性の気配は感じ取れなかった。

なぜいないか、それは分からない。しかし勇者はすぐに行動を起こした。

「おい！お前ら！」

勇者は声をあげた。街全体に勇者の声が響き渡り、その声にサキュバスと男達の視線が勇者に向く。彼らと視線が交差する。勇者の姿を見て、サキュバスと男達は目を見開き、身体を硬直させたまま動かない。瞳に映る驚愕の感情。沈黙が勇者とサキュバスの間を支配する。

しかし――

「おい、待て！」

沈黙は長くは続かない。勇者の姿に気づき、身の危険を感じ、サキュバス達は男達を連れて、空を飛んだ。逃げるつもりだ。

「くそっ！」

しかしここで逃してはいけない。

地面を踏みしめ、跳躍する準備をする。右手を腰に携える鞘に置き、すぐに剣を抜ける体勢にはいる。幸いサキュバス達はそう遠くに行っていない為、この距離だと直ぐに追いつけるはずだ。



勇者は飛び立ったサキュバスの内、初動が遅く、他と比べて出遅れたサキュバスに狙いを定めた。

剣の柄を握って、膝を曲げ、跳ぼうとし――

「あら、勇者さん♡こんばんは♡」

「……!」

耳の直ぐ側で誰かの声が勇者に囁いた。勇者は急いで跳躍する姿勢を崩し、身を翻して耳元に一瞬で近づいた何者かから遠ざかった。

「あれ、なんで逃げちゃうんですか？」

「……お前、何者だ」

目の前の悪魔は子供のような大人だった。身長は勇者よりも頭一つ分ほど低い。しかし彼女の胸の大きさは体に見合わないほど巨大だった。体と胸のアンバランス度が凄い。

しかし、そんなサキュバスの女としての魅力に視線がいきながらも勇者の中、目の前の敵に対する警戒心は最大だった。

さっき近づいてくる瞬間、音がしなかった。空気すらも振動させず、ただ忽然と勇者の直ぐ横に現れた。只者ではない、と全身が警告を発している。

――そしてその身体から感じる圧倒的なオーラも格別だった。ただ立っているだけなのに、その圧で腰が抜けてしまいそうなほどの存在感。勇者でなければその圧力に膝から崩

れ落ちていただろう。

勇者は今まで培ってきた感覚から、目の前のサキュバスがこの街を支配するトップだと感じた。この街にいたサキュバスよりも、これまで戦ってきた魔王軍よりも、比べ物にならない強さだ。

「この街にいた女性はどうした？」

「え、人間の女？見て分らないんですか？——邪魔だったんで殺しちゃいましたよ♡」  
「なっ……！」

「だってそうでしょ？見ての通り、私達はサキュバス♡人間の雄の精を吸う淫魔。食料にもならない女なんて必要ないでしょ♡」

「くそ悪魔が……」

「もう、勇者さん、落ちて着いて♡早とちりしちゃだーめ。私は争い事が嫌いなんです。だからもし良ければその剣、下ろしてくれませんか？」

「なんだ、交渉か？」

「はい♡もし出来るなら私達も仲間内で犠牲を生みたくありません。穏便に事を済ませませんか？」

「俺も勿論、争い事はしたくない。——お前達がこの街の人々を解放すると約束するのなら剣を下ろそう」

勇者はサキュバスに逆に提案した。勇者も好き好んで討伐をしているわけではない。ただ、人間達に平穏が戻ればいいのだ。そこに魔王軍を討伐しなければならないという盟約は存在しない。存在するのは勇者として人間を救うという使命感だけだ。

サキュバス達を討伐しない代わりに囚われた人間達を解放する。それは犠牲を生みたくないと言った目の前のサキュバスにとつてもいい条件のはずだ。

——しかし、

「えー、それは無理なんですよ♡」

「何故だ？」

「だって私達は何年もかけてこの街を作ったんです。男達も色んな所から集めて。——それに解放したら私達の食料がなくなるじゃないですか。勇者さんも知ってるでしょ、私達のご・は・ん♡」

サキュバスが舌を舐める。月明かりが蠱惑的な舌に絡み付く唾液に反射した。

「代わりに私が気持ちよく勇者さんをしてあげますからそれでチャラになりませんか？」

「街の皆を解放すると約束するのなら俺もお前らを倒すのはやめてやるが？」

ここで引いてはならない。街の平和を取り戻すため、この場は必ず負けてはならない。

「私のテクニクが味わるんですよ♡勇者さんこそ諦めませんか」

「質問に答える。——もう一度言う。街の皆を解放すると約束するならお前達を倒すのは

やめてやる」

「私達と一緒に気持ち良くなりませんか♡勇者さんも争い事はしたくないでしょ？なら私が勇者さんを何も考えられないくらい気持ちよくさせてあげますから♡それでこの街は諦めてくれませんか。——まあ、私達のテクニクだと一生普通の行為じゃ満足できなくなりますけど♡」

「俺はお前達からこの街の人々を救うために来たんだ。この世界の平和のためにも諦める訳にはいかない」

勇者は片足を下げ、すぐ跳躍できる姿勢にした。話が通じない。交渉決裂。このままでは埒が明かない。

サキュバスにも勇者の姿勢の意味が伝わっただろう。

「なるほど……もう交渉する余地はないということですね。残念です♡なら私も全力でこの街を守る為にやらせて頂きますよ」

「俺の質問に答えなかったのはお前の方だ。交渉を破棄したのはお前達の方で俺ではない。勝手に俺に責任を押し付けるな」

「……」

刹那、勇者の姿は一瞬にして消え、超人なる跳躍でサキュバスの方へ向かった。光速に匹敵するほどの速度で飛び込む。鞘から剣を抜き、振り上げる。

一方サキュバスは勇者が消えるほどの速さで近づいているのに対し、無防備で棒立ちである。

「ふふ♡可愛らしい勇者さん。私を楽しませてくださいね♡」

その言葉を最後に、決戦の火蓋が切られた。

＊

「——はあはあ……」

——そして今に至る。勇者は内心とても驚いていた。戦いが始まり、一秒にも満たない時間で、お互いの場所が目回しく変わる中、勇者は始めの攻撃から今に至るまで一度もサキュバスに攻撃を与えられていなかった。

間合いをつめることまでは出来るが、問題はその後で、攻撃はことごとくギリギリのところで躲されてしまう。

偶然だと思って何回も最大限の速さと力で攻撃をしても、いつもすんでのところで避けられ、間合いを遠ざけられた。

そして戦いが始まってから、サキュバスは一度も攻撃をせずに勇者の攻撃を淡々と受け流すだけだった。まさにいたちごっこだった。

「もう、諦めましよ、勇者さん♡」

サキュバスは余裕そうに微笑を浮かべながら、悠然と勇者を見つめ、言った。

「すばしっこいヤツだな……」

肩で呼吸をしながら、勇者は数十メートル先にいるサキュバスを睨みつけた。戦闘を開始してからどれくらい時間が経っただろうか。十分？一時間？二時間？何度も跳躍と攻撃を繰り返し、流石の勇者でも体力が限界に近づいていた。

時間経過が曖昧になるほど、勇者は焦っていた。これまでこんなに手こずった相手はいなかった。

疲労もなるべく顔に出さないようにしているが、正直限界だった。

「もう終わりですか？もつと楽しませて下さいよ♡」

「うおお！！」

雄叫びを上げ、剣を振り上げる。疲労を無視し、挑発するサキュバスに空中から斬りかかる。

「もう、勇者さん、そんな遅い攻撃じゃ私に触れませんよ♡」

相手の首を狙った勇者だったが、サキュバスは最小限のバックステップで攻撃を躲した。「くそっ！」

勇者は着地すると同時に、地面を蹴り、体勢を低くしたまま素早くサキュバスの懐に入

り込んだ。

サキュバスの股下から剣を振り上げ、サキュバスの身体を左右の真つ二つに――

「だーかーら、遅いんですつて♡」

「なっ!」

確實に仕留めたと思つた勇者だったが、サキュバスは勇者が剣を振り上げるよりも速く、超人的な身の翻しによつて剣撃を避けた。

勇者は一度攻撃をやめ、サキュバスから距離をとつた。

「はあ、はあ……」

「まだ、やります? 勇者さんの姿からみるにもうラストですかね? 私に負けたりしたら勇者さんの面目なくなっちゃいますよ♡ほーら、頑張つて此方に来て下さい♡」

凶星だった。残りの体力から考えるに最高出力の攻撃は残り一回しか出来ないだろう。それ以降は剣の振りと跳躍の速さは格段に下がる。そうなつたらもう、目の前の相手に勝つことは出来ない。

これが最後のチャンス。勇者は片足を下げ、跳躍姿勢となつた。全身の血液に意識を集中させる。血管の巡りを加速させ、全身全霊で目の前の敵を殺しに挑む。

「さあ、早く此方に♡!」

サキュバスが両腕を広げ、勇者を受け入れる姿勢になつた。

完全なる無防備の姿勢。明らかに勇者をおちよくリ、舐めている姿勢だった。

——そしてそれは勇者のプライドに火をつけた。

「これが、最後だ!!!!」

一瞬にして跳躍し、サキュバスの首を切ろうと剣を振り上げる。地面が削り取られるほどの力強い踏み込み。残像が見えるほどの神速の剣振り。今までの攻撃の比ではない。光速を越え、この世界では誰もその攻撃を避けられるはずのない勇者の渾身の一撃。

「あ♡来てくれた♡」

「なっ!!」

——しかし、それはこの世界での話。サキュバスという人間界とは別世界から来た魔物には通じない。普通なら目に見えないほどの速さのはずの剣をサキュバスは己の漆黒の翼でいとも簡単に受けた。本来柔らかいはずの羽が今は金属のように硬かった。

勇者は腕力で押し込もうと腕に力を入れた。翼と剣との間に火花が散り、その火が暗澹の街を一瞬照らす。

「うおおお!!!!」

喉が潰れるほどの雄叫びを上げ、自らを鼓舞する。この翼さえ越えれば敵を倒せる。この翼さえ、越えれば——

「もう、勇者さんったら頑張っちゃって。でももういいんだよ♡はーい、お疲れ様♡」



びくともしなかった翼がより一層強度を帯びた。均衡していた力が崩れ、翼が勇者の剣を弾いた。

放物線を描きながら剣が宙を舞う。

剣は勇者から遠い場所に落ちた。カランカランと金属の音が沈黙の夜に響いた。

「くそっ！」

勇者は急いで剣を取りに行こうとするが――

「ほーら♡だーめ♡」

手を広げたままだったサキュバスが背の方向に振り向こうとした勇者に抱きつき、包み込んだ。少し宙に浮かんでいるのかサキュバスと勇者の背は同じくらいになっていた。

「……………くっ！離せ！」

勇者の脇の下から腕を入れ、羽交い締めのような体勢で勇者を逃すまいと抱きしめる。サキュバスの体が勇者の身体に密着した状態となり、勇者の直ぐ横にサキュバスの顔がある。

「感じて♡私のか・ら・だ♡」

耳元でサキュバスが囁いた。脳の奥まですーっと入るような聞きたくなる声だった。

「くそ！はな、せ！」

必死に動いてサキュバスから離れようと体を動かす。沼から抜け出すように、必死に抵

抗する。

——しかし小柄なはずのサキュバスの身体は一ミリもびくとも動かない。

しかも、サキュバスは裸に近い服装をしているため、格好動く度に密着するサキュバスの身体——胸や腕、脚の柔らかさ、細さを嫌でも感じてしまう。

全身が柔らかさに包まれる。どれだけもがき足掻いても、勇者の抵抗力はサキュバスの柔らかさに吸収された。

沼から出ようとしても逆に沼に引きずり込まれる感覚。それが勇者を底へと沈ませる。サキュバスの体温が勇者の意識を朦朧とさせていく。サキュバスの身体から醸す淫魔特有の甘い匂いも加わり、思考を掠め取る。

「もう、そんなに動いちゃだーめ♡ギュー♡」

一層サキュバスが抱きしめる力を強めた。サキュバスの甘い香りが鼻から脳へ、全身へと渡る。

不思議なほど体から力が抜けていく。

「ほら、私の身体の形を感じて♡」

抵抗する思考もなく、その言葉は勇者の脳内へ侵入していく。

勇者はサキュバスの言葉通り、無意識に全身に意識を集中させ始めた。それがサキュバスの催眠の第一歩だとは知らず……。

——胸の先に当てられた二つの硬い部分の感触。その二つが勇者の肌を擦り上げる。胸元に広がる柔らかい感触。吸い付くように勇者の胸と密着する。

——女の魅力を最大限まで高めた体のボディライン。男を欲情させるためだけに作られた身体は勇者に絡み付き、サキュバスの全てが繊細に勇者の身体に伝わる。

心臓の鼓動、血管の流れ、見えないはずの感覚が勇者の元へ流れ込む。

「くそ、はな……せ」

「離さないよ♡ほら、もう力が抜けてきた♡もつと身体の力を抜いていこうね♡」

脳に響き、染み渡るような声色に全身が幸福感に包まれる。

身体に力が入らない。腕と脚が弛緩し始めた。

——このままでは負けてしまう。薄れゆく思考の中、勇者は危機感を感じていた。しかし、それとは裏腹に身体はどんどん力が抜けていく。身体がサキュバスに侵食されている感覚だった。

自分でも分かるほど抵抗力が弱くなっている。頭から首、肩を通り、太股から関節へ、関節から手首、足首、そして最後に指先の一本一本まで力が抜けていってしまう。

「安心して私に包まれようね♡」

「は、な、……せ」

唇を動かす力もなくなってきた。呂律も回らない。反抗しようとするも、もう身体に力

が入らない。全身の神経が消えている。

「うん、いい感じ♡目もとろんとしてきて閉じてきてるね。はい、そのまま寝ちやおうね♡」

バサツと音を立つ。ぼんやりとした思考のまま、勇者は大きく広がった翼を見つめる。

「……」

段々と翼が勇者に近づいていく。月明かりを隠し、闇夜の世界へ勇者を誘っていく。そして――

サキュバスの翼がより一層、大きく広がり、勇者を覆い包んだ。剣が受けられた時とは違い、その翼は柔らかく、そして温かい。

月明かりを遮断し、漆黒が勇者を拘束する。その姿は、端からみたらもう黒い繭のようにはしか見えない。

繭の中はサキュバスの体温と甘い匂いで充滿しており、勇者の残る意識を奪い去っていく。

「はな……」

もう口が動かない。舌が弛緩する。しかし、それが気持ちいい。身体力が抜けることが、温かさを感じることが、サキュバスに包まれることが、全てが心地よい。身体の全てをこの温もりに任せたくなってしまう。

「ほら、目、閉じてきたよ♡身体の感覚ももう分からないね♡身体の境目が分からなくて溶けていくみたいでしょ?——でもそれでいいんだよ、この温かさに身体を預けて♡」

「……」

暗示のように、耳元で言われた通りに勇者の目が段々と閉じていく。重りが目蓋に乗っているかのように重い。

もう反抗する力さえも残っていない。思考する力もゼロに近く、考えたとしても一瞬にしてサキュバスに包まれた甘い空気に溶けていってしまう。

瞼が閉じ、暗闇が勇者を向かい入れる。あれ、自分ってどこにいるんだ?どうしてこんなところに?どうしてこんな風にな?霞む意識の中、数々の疑問が薄っすらと浮かび上がる。しかし、その答えが出ることはなく、疑問自体が溶けて消え去り、白くぼーっと何も考えられない意識が脳を埋め尽くす。

——そして

勇者はついにサキュバスに包まれたまま温もりに身体を許し、預けた。

「もう、可愛いんだから♡いっぱい可愛がつてあげるからね♡大好きだよ、勇者さん♡」  
そんな甘い囁きが黒い繭の中に反響した。

\*